

# 愛着理論から見た発達病理と精神病理

教育心理学コース 三 原 理 恵

Psychopathology from the Perspective of Attachment Theory

Rie MIHARA

Bowlby (1969, 1973, 1980) who proposed the concept of “internal working models” of self and other in attachment relationships, considered that psychopathology such as depression and pathological grief stem from early insecure attachment relationships. He suggested that defensive exclusion of internal working models cause serious emotional disorders. Recent development of AAI (Main & Goldwyn, 1984), which enabled to measure adult attachment representations, has facilitated studying the intergenerational transmission of caregiver-child relationships and the relation between attachment and various psychopathology. This paper reviewed studies about attachment of children under unfavorable environment, relation of early attachment to children’s aggressive behavior, and relation between adult psychopathology and traumatic experiences in early attachment relationships. Finally, some considerations were given to the prevention of intergenerational transmission of traumatic attachment relationships.

## 目 次

- I. 本論文の目的
- II. 内的作業モデルの防衛的情報処理と愛着の型
  - A. 内的作業モデルの形成と発達
  - B. 防衛的情報処理
  - C. 愛着の型とその測定
- III. 愛着と発達をつまづき
  - A. 被虐待と愛着との関連
  - B. 親の気分障害と愛着との関連
  - C. 攻撃的行動と愛着との関連
- IV. 愛着と精神病理および養育行動
  - A. 臨床群の愛着
  - B. 喪失や外傷の解決・未解決と精神病理との関連
  - C. 喪失や外傷の解決・未解決と養育行動との関連
- V. 不幸な世代間伝達を越えるために

## I. 本論文の目的

愛着理論を提唱した Bowlby (1969, 1973, 1980) は、母子関係に代表される愛着関係の質が世代から世代へと受け継がれる事実注目した。彼は認知心理学的な内的作業モデル (internal working model) 概念を中核

に据え、分離不安や対象喪失の過程について整理し、抑うつや異常な悲嘆といった精神病理を愛着関係の病理として捉え直した。

Bowlby の理論は、臨床の実践において治療者が前提とする常識的枠組みとして確かに存在している。しかし愛着理論は、治療理論としてよりもむしろ、発達心理学の領域において、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) によるストレンジシチュエーション法 (Strange Situation Procedure; 以下 SSP) というツールと共にめざましい発展を遂げ、多くの有益な知見を生み出した。この背景には、Bowlby 自身が対象関係論から出発しつつも、その主観的 (幻想) 世界偏重の傾向を批判し、客観性を重視して色々な分野の実証研究に論拠を求めたことも深く関わっているとされている (Holmes, 1990 も参照)。

発達の分野における愛着研究の知見は着実に蓄積され、親による虐待や親の感情障害といったハイリスクな家庭環境にある子どもの発達についても、愛着の質の観点から検討されてきた。さらに、愛着の内的作業モデルの概念が精緻化され、成人の愛着を測定可能にした成人愛着面接 (Adult Attachment Interview; 以下 AAI) が開発されると (Main & Goldwyn, 1984)、世代間伝達というすぐれて臨床的な関心事を実証研究の俎上への

せることができるようになった。これは精神医学や臨床心理学的な関心を持つ者にとって、非常に魅力的かつ画期的な出来事であった。こうして愛着の質的要素の連続性が検証されたことによって、精神病理との関連についても、90年代にはより実証的に内的作業モデルのあり方に着目して検討することが可能となり、これまでに見出された型以外に、病理と関係の深い特殊な型が注目を浴びるようになっていく。

本論文では、内的作業モデルとその防衛的情報処理の概念を解説した上で、子どもの発達病理について、愛着の観点から最近の研究を整理する。続いて、境界性人格障害や解離性障害を始めとする精神病理、および養育困難と、喪失や虐待等の愛着にまつわる外傷体験との関連について、近年の研究動向を踏まえて概観する。最後に、不幸な関係性の世代間伝達の予防に有効と考えられる諸要因を整理し、今後の課題を提示したい。

## II. 内的作業モデルの防衛的情報処理と愛着の型

論を進める前に本章では、Bowlby 理論の中核をなす内的作業モデルの概念について、その形成と発達の過程を示し、それが防衛的に働くとはどのようなことを言うのか整理する。また、実際の研究で用いられる愛着の型に関して概説する。

### A. 内的作業モデルの形成と発達

内的作業モデルの形成とその発達過程を簡単にまとめると、次のようになる。まず、子どもは愛着対象との日常的な相互作用から、対象の接近可能性や情緒的応答性について期待を抱くようになる。それは「自分は愛されていて、必要なときはいつでも助けてもらえる存在であり、他者は自分の求めに応じてくれる存在である」「自分には助けてもらう価値などなく、他者も決して自分に応えてくれはしない」といった主観的確信に繋がっていく。このように、自己および他者（対人世界）に関する表象モデルが相補い合う形で内的作業モデルが形成されると、これを基にして、人は、親との関係のみならず発達に伴って広がる様々な対人関係においても、対人的情報を知覚・評価し、予測を立て、自己の行動をプランニングしていくことになる。したがって、早期に母親との間で愛情に満ちた関係を享受し得たか否かは、内的作業モデルの発達を通して、自分が親となったときにわが子との間で愛情豊かな関係を築くことができるかどうかの影響を及ぼすと考えられている。

### B. 防衛的情報処理

Bowlby (1980) は、深刻な情緒的問題には、内的作業モデルに関わる防衛的な情報処理過程が密接に関連していると指摘した。これを筆者なりに整理してみると以下ようになる。①知覚時の防衛的排除：特定情報の知覚が長期にわたって選択的に排除されること。たとえば、愛着欲求が応答的に満たされない経験が持続すると、愛着にまつわる感情や行動を喚起する情報は一切意識から排除される。②既存のモデルへの過剰な同化：新たな情報が既存の固定的なモデルに合致するように歪められ、現実との不一致が大きいにも関わらずモデルが更新されないこと。精神分析理論で言うところの「転移」もこれに当たると考えられる。③想起時の防衛的排除：特定の情報の想起が阻まれること。いわゆる「抑圧」であり、とりわけ対象喪失が病理的な悲哀を引き起こすときに問題になる。④多重モデル：意味記憶とエピソード記憶が乖離しており、相矛盾する複数のモデルが統合されずに併存している状態のこと。たとえば、虐待を受けた具体的経験にも関わらず、親に愛されていたという一般的なモデルを有している場合などである。

### C. 愛着の型とその測定

実証研究上、内的作業モデルは通常、以下に述べる「愛着の型」に体现されるとして操作的に定義され、発達段階に応じて定められた手続きから評定、分類されている。

乳児期における愛着の代表的な測定法は SSP である。実験室での母親との分離・再会、見知らぬ人との対面等のストレスを設定し、乳児の反応を観察することで、乳児の愛着は回避行動が目立つ A 型 (avoidant)、愛着行動が安定している B 型 (secure)、抵抗行動が顕著な C 型 (ambivalent) に大別される。近年新たに加わった D 型 (disorganized/disoriented) は、愛着行動が組織化されておらず上記 3 型のいずれにも分類されないタイプで、矛盾する行動を同時に示すなど不可解な行動パターンをとる。なお、B 型はいわゆる愛着の安定した (secure) 型で、他は不安定 (insecure) な型とされる。

幼児期に入ると、行動レベルの愛着の測定に関しては、SSP に修正基準を適用したり、年齢相当の分離・再会課題を設定したり (Main & Cassidy, 1988) という工夫がなされ、表象レベルの愛着に関しては、人形 (Bretherton, Ridgeway, & Cassidy, 1990) や家族の写真 (Main, Kaplan, & Cassidy, 1985) を用いた投影法的課題が案出されている。

児童期では、表象レベルの関係性の型を捉える質問紙

尺度が開発されている (Lynch & Cicchetti, 1991)。

青年期以降になると、AAIが実施可能となる。これは、子ども時代における親との愛着関係の記憶や、過去の愛着関係が現在の自分のあり方に与えている影響などについて想起を求める半構造的面接である。面接で語られる内容や語りの一貫性から、過去の推測される愛着関係と、愛着にまつわる現在の心的状態を評定し、それらに基づいてDs型 (dismissing/detached), E型 (entangled/preoccupied), F型 (free/autonomous)のいずれかに分類する。これらはそれぞれ、乳児期のA型, C型, B型に相当するとされる。

Ds型とは、自分の人生における愛着関係の重要性や影響を低く評価するタイプで、表面的には親を理想化しポジティブに評価するものの、具体的エピソードとして親との相互作用を語ることはない。対照的にE型は、かつて親が自分に対してとった態度などに現在も強くとらわれているタイプで、愛着関係の歴史を首尾一貫した形で語れず、内容が矛盾したり激しい怒りを示したりする。それに対してF型は、過去の愛着関係が自分の人生や現在のパーソナリティに与えている意味を深く理解しているタイプで、愛着関係の歴史をポジティブ・ネガティブ両面合わせて整合一貫した形で語るができる。さらに、U型 (unresolved) が付与される場合がある<sup>1)</sup>。これは、過去に生じた愛着対象の喪失や外傷的な出来事に対し、心理的に未解決であったり喪の作業が完遂されていなかったりするタイプで、亡くなった人のことを今でも生きているかのように語るといったメタ認知機能の破綻が見られる。

### Ⅲ. 愛着と発達をつまづき

子どもの不安定な愛着や組織化されていない愛着が形成されやすくなる親側の条件として、虐待を行ったり、感情障害に罹患していたりするために、適切な情緒的応答性が期待できないことが挙げられる。こうした愛着関係が不安定な子どもたちは心理的不適応を来しやすいが、言語化能力がまだ発達途上にあるためにうまく言葉で表すことができず、攻撃的行動や身体症状の形をとって表れることが多い。

本章では、最初に被虐待と愛着との関連について、次に親の感情障害と愛着との関連について検討し、攻撃的行動を示す子どもの愛着に関して見ていく。

#### A. 被虐待と愛着との関連

##### (1) 被虐待児の特徴

いわゆる虐待は、高率で世代間伝達される (遠藤, 1992等)、つまり親から虐待されて育った子どもが親となったとき、今度は自分の子どもを心ならずも虐待してしまいがちという点で、きわめて深刻な問題である。

虐待はその内容によって、身体的虐待 (physical abuse), 性的虐待 (sexual abuse), 無視 (neglect), 心理的虐待 (emotional maltreatment) の4つに分類される (Cicchetti & Toth, 1997)。ただし、虐待内容が重複している場合もまれではない。

虐待する母親とその乳児の行動特徴を検討したCrittenden (1981)によれば、身体的虐待を行う親は隠れた敵意を持ち、相互作用において子どもの目標志向的な行為を無神経に妨げたり葛藤的な情緒シグナルを示したりして自分勝手に働きかけるため、乳児は驚かされて不安や抵抗を示し、母子共に苛立ちを高めていく。他方、無視を行う親は相互作用が少ないのが特徴で、身体的に距離をとり、感情表出やアイコンタクトに乏しいため、乳児も活動性が著しく低下し、ますます相互作用が減るといった悪循環が続くという。

しかし、SSPの伝統的な3分類を用いて被虐待児の愛着を検討した80年代の研究では、健常群に比べると相対的に少ないものの相当な比率でB型が存在するという、理論的には解釈困難な結果が得られていた<sup>2)</sup>。こうしたことよりCrittenden (1985)は、被虐待児の多くが、母親に接近を求め接触を維持しようとする一方で回避と抵抗をも示すことに着目し、被虐待児に典型的な型としてA/C型の概念を提唱した。このような子どもは、Lyons-Ruth, Connel, Zoll, & Stahl (1987)によっても、unstable avoidantとして記述された。

##### (2) 乳児期におけるD型の発見

こうした中で、従来の研究においてSSPで「分類不能」とされていたケースを、サンプルの特徴 (中流階級群, ハイリスク群, 虐待群, 抑うつ群等)と共に再検討したMain & Solomon (1990)は、愛着方略が組織化されていないことを特徴とするD型を見出した。そして彼らは、CrittendenのA/C型は、D型のうちでも被虐待児に典型的な下位分類の一つではないかと指摘した。D型の子どもは、不安定な愛着とされるA型やC型が、分離と再会というストレスに対して、親を求めない、ないし親にしがみつくといった中心的な対処方略を確保しているのとは対照的に、抱えるべき方略が定まっていない。具体的には、接近と回避のような矛盾する行動を同時に示したり、ぼんやりとした表情で動きが止まっ

たり、行動が中途半端で親に向けられなかったり、親に対する不安をはっきりと見せたりする。こうしたあり方について Main & Hesse (1990) は、親の側の恐怖が介在していると指摘し、おびえた親の行動が結果として子どもをおびやかすことになると解釈している。そして、D型の子どもの接近と回避の葛藤は、愛着対象が恐怖を引き起こす存在であると同時にその恐怖を緩和する存在でもあるところに由来し、それらが同時に解発される結果、相互に抑制し合い、行動や表情の停止という状態が生じると考えている。

彼らの仮説は、次に示すように実証的に支持されている。Carlson, Cicchetti, Barnett, & Braunwald (1989) は、身体的虐待や無視、心理的虐待を受けている12ヶ月児22名の愛着について、D型を加えた4分類法で再分析した結果、被虐待児は統制群に比べて不安定な愛着を示すこと、とりわけD型は、統制群では19%であるのに対して虐待群では81.8%と高率になることを見出している。

### (3) 乳児期以降の愛着

被虐待児の乳児期以降における愛着と発達についても、研究が積み重ねられてきている。

就学前児を対象としたCicchetti & Barnett (1991) は、生後30ヶ月、36ヶ月、48ヶ月時点で愛着を測定し、統制群と比較した。その結果、被虐待児にもB型は一定の比率(20.5~30.6%)で存在するが、統制群に比べてB型の大部分は不安定な型に移行しやすい(80%)こと、対照的にD型やA/C型は移行しにくい(14.3%)ことを見出されたのである。以上より彼らは、混乱した対処であるD型やA/C型が被虐待児にとって「適応的な」型となってしまう可能性を指摘している。

児童期に関してはLynch & Cicchetti (1991) が、7~13歳の被虐待児を対象に、母親など重要な他者との表象レベルの関係性の型(patterns of relatedness)について、情動の質と心理的接近欲求の2次元のありようから検討している<sup>3)</sup>。その結果、虐待群の34%が母親との関係性について、愛着のD型に相当するconfused型(情動も心理的接近欲求も共に高い型)を示しており、ポジティブな情緒を報告しつつも、相手に心理的にもっと近づきたいという不満があることが示唆された。さらに、教師や親友という他の重要な他者との関係性の型が、母親との型と一致する子どもが59%にも上ること、また被虐待児は親友に対する心理的接近欲求が強いことも見出された。このように、虐待によって早期に不安定な愛着が形成され、児童期にも関係性のネガティブな表

象が持続し、親以外の他者との相互作用も規定されていくという経路が示唆されている。

しかしながら、Toth & Cicchetti (1996) の知見には希望を見出すことができる。彼らは被虐待児(8~12歳)の抑うつ症状と認知されたコンピテンスについて、関係性の表象との関連を検討した<sup>4)</sup>。その結果、虐待内容が性的虐待で母親との関係性がconfused型の子どもが最も深刻な抑うつを示したが、母親との関係性がoptimal-adequate型(=B型)の被虐待児は相対的に抑うつ得点が低くコンピテンスが高かったのである。さらに、deprived-disengaged型(=A-C型)でも親友との関係性がoptimal-adequate型であった5名は、相対的に低い抑うつを示した。これらの結果は、虐待という過酷な経験に対して関係性の表象が緩衝剤として働く可能性や、親とのネガティブな関係性にもかかわらず他者との間に良好な関係性を築くことのできる可能性を示唆していると言えるだろう。

## B. 親の気分障害と愛着との関連

### (1) 気分障害の親を持つ子どもの愛着

臨床的に問題となるほどの抑うつは、母親側の広範な脆弱性として、母子の愛着関係と子どもの発達を妨げるリスクとなることが指摘されている(Radke-Yarrow, McCann, DeMulder, Belmont, Martinez, & Richardson, 1995)。抑うつ状態に陥ると、自分には価値がないという感覚を抱き、ストレスに対処して感情を適切に統御したり環境に働きかけたりすることが困難になる。他者に対してもネガティブな予期を抱くため、親密な関係を築くのが難しい。こうした特徴は、子どもとの間にも持ち込まれることになるという。

実際、親の気分障害(感情障害)と子どもの愛着の関連を検討した諸研究は、気分障害の母親のもとで、不安定(A型やC型)ないし組織化されていない(D型やA/C型)愛着を示す子どもが相対的に多くなることを報告している。

たとえば、両親の一方が躁うつ病である男児7名を統制群と比較したGaensbauer, Hermon, Cytryn, & McKnew (1984) では、12ヶ月から15ヶ月、18ヶ月と時を追うにつれ、躁うつ群においてA型が増加しB型が減少している。また、感情障害の母親(単極性うつ病、躁うつ病)を持つ2~3歳児を対象としたRadke-Yarrow, Cummings, Kuczynski, & Chapman (1985) では、55%が不安定な愛着を示し、特に躁うつ病の場合は79%と高率であった。中でもA/C型は、統制群には存在しないのに対して感情障害群の20%を占めていたう

え、母親の症状が慢性ないし重症であるほどその比率が高まったのである。さらに、単極性うつ病性障害の母親とその乳児・就学前児<sup>3)</sup>を対象とした Teti, Gelfand, Messinger, & Isabella (1995) では、B型は統制群が抑うつ群を大きく上回っていた。対照的に、D型の乳児や単一の愛着方略を持たない型(A/C等)の就学前児は、抑うつ群で統制群の約3~4倍に上り、また彼らの母親は、愛着方略が組織化されている子どもの母親に比べて抑うつが重症であることも見出された。こうした結果より Teti et al. (1995) は、母親の抑うつについては慢性度や重症度に注目すべきであり、子どもの愛着については安定か不安定かのみならず、方略が組織化されているか否かが臨床的重要であると結論している。

#### (2) 母子相互作用の特徴

Radke-Yarrow (1991) はさらに踏み込んで、感情障害(単極性、双極性うつ病)の母親とその16~42ヶ月児を対象に、感情表出の相互作用に注目して愛着との関連を検討した。その結果、感情障害の母親は表出の程度が極端で、ネガティブな感情を頻繁に表出するという感情統制の失敗が顕著であった。特に単極性うつ病の母親は、子どもとの間で長時間悲しみをやりとりし、その感情の原因を子どもに帰属させてしまうという特徴が見られた。そこで母親の感情内容によって、悲しみと不安が優勢な10組と、怒りと苛立ちの優勢な10組を抽出して比較したところ、前者の場合、母親が子どもの行為とは関係なく不安を表すため、9名もの子どもが不安定な愛着を示した。ところが後者の場合は、母親は子どもを尊重しないものの、時折子どもの行為に随伴する反応を示すためか、B型の子どものみが4名見られたという。

一方、Radke-Yarrow et al. (1995) では、双極性うつ病の母親を持ち、18ヶ月~42ヶ月時に不安定な愛着を示した子どもの6歳時の不安が相対的に低くなるという、一見解釈し難い結果が見られた。そこでこれらの母子の相互作用を分析したところ、非応答的で統制的な母親に対し、子どもが距離を保ち自己主張的になるか要求的でさえあることがわかったのである。これより彼らは、こうしたパターンが症状の出現を防ぐ働きをしているのではないかと推測している。おそらく、虐待の場合と同様に、ストレスフルな環境にある子どもにとって、組織化されていない、あるいは不安定な愛着の型は、適応の工夫の結果とも考えられる。しかし、一時的な適応の工夫も長期的には情緒障害のリスク要因となることは、Bowlby (1980) が既に指摘しており、その意味でフォローの必要な子どもたちであると言える。

### C. 攻撃的行動と愛着との関連

#### (1) A型への注目

攻撃的問題行動というとき、DSM IVにおける反抗挑戦性障害や注意欠陥障害、行為障害がこれに当たる<sup>4)</sup>。これらの発生に寄与する要因に関しては最近、家庭内ストレス、親のしつけの厳しき、子どもの気質や器質的要素、愛着の質という4因子モデルが提唱されている(Greenberg, Speltz, & DeKlyen, 1993)。すなわち、器質的要素や物理的環境要因を無視できないのと同様に、重要な他者との関係性の障害にも目を向ける必要があるのである。

愛着理論の枠組みでは、早期の愛着の質が後の仲間関係での行動・適応に影響を及ぼすという仮説のもとで研究が行われ、特に Egeland & Sroufe による大規模な縦断研究で、3分類法によるA型の愛着と、後の攻撃的行動や不適応との関連が確認されてきた(Egeland, Pianta, & O'Brien, 1993; Renken, Egeland, Marvinney, Mangelsdorf & Sroufe, 1989等)。

たとえば、Egeland et al. (1993) は、6ヶ月時に高い侵入性を示した母親45名の子どもを追跡し、統制群と比較したところ、12ヶ月までに子どもの愛着はA型に分類されやすくなり、42ヶ月時点の実験室観察では反抗的で回避的、多動となり、小学校1年生では教師評定による問題行動の得点が高くなったという<sup>5)</sup>。

#### (2) D型への注目

しかし、4分類法を用いた最近の研究では、攻撃的行動を示す子どもにはD型が多く見られている。

Lyons-Ruth, Alpern, & Repacholi (1993) は、低収入層において、D型を含む4分類法による18ヶ月時の愛着との関連を分析したところ、仲間に攻撃を向ける5歳児17名のうち71%もが、かつてD型と分類されていたのである。そのうえ、D型児27名中の59.2%は回避的な行動を見せ、A型の副分類を付与されたのに対し(A-D型)、組織化されたA型に分類されていた子どもは攻撃的傾向を示しにくかったという。また、Greenberg, Speltz, DeKlyen, & Endriga (1991) と Speltz, Greenberg, & DeKlyen (1990) は、反抗挑戦性障害と診断されてクリニックにリファーされた就学前児(4~6歳)の愛着について、4分類法<sup>6)</sup>で統制群と比較した。その結果臨床群ではB型が少なく、大部分が乳児期のD型に相当するcontrolling型に分類されたうえ、愛着の不安定な子どもはB型児に比べて分離時に示す苦痛が非常に大きかったのである。これについて Greenberg, DeKlyen, Speltz, & Endriga (1997) は、反抗的な行動は実は親の目を引くためのものなのだが、親

は子どもの不安には気づかず、もっぱら攻撃性に注意を向けやすいことを指摘している。さらに親の AAI 分類を調べたところ、臨床群では不安定型が多く、母子の愛着はかなりの率で一致し（2 分類法で 82%，4 分類法で 70%）、controlling 型児の母親が U 型に分類されやすいことを報告している。

以上より、攻撃的行動のリスク因子としては、以前に言われていたような純粋な A 型というよりはむしろ、回避傾向を併せ持つ D 型である可能性が出てきていると考えられる。ただし、Lyons-Ruth (1996) は、経済的に恵まれたサンプルでは早期の A 型と後の攻撃的行動との間に有意な関連が見出されないことから（たとえば Fagot & Kavanagh, 1990<sup>9)</sup>等）、母子を取り巻く環境の性質によって愛着の関連の仕方が異なる可能性を指摘している<sup>10)</sup>。今後は、サンプルの性質や母親の特徴を考慮し、人数を増しての研究が望まれる。

#### IV. 愛着と精神病理および養育行動

不安定ないし未解決の愛着の型は、精神病理へのリスクとなると考えられる。特に、解離性障害や境界性人格障害を始めとする精神病理を深刻な外傷体験の帰結と見なすアプローチの台頭と共に、愛着理論の枠組みを用いて、外傷そのものよりもそれを内的にいかにか解決し得ているかというメタ認知機能のあり方に注目する研究が増えつつある。

本章ではまず、成人の不安定な愛着の型と病理との関連について整理した後で、外傷体験の心理的な解決・未解決について、病理との関連、養育行動との関連の順に検討する。

##### A. 臨床群の愛着

###### (1) 精神病理に対するリスク要因としての愛着

成人における不安定な愛着の型のうち、Ds 型は愛着関係にまつわる感情を抑圧・否認し、関係性から引きこもる。対照的に、E 型はそれらの感情を統御できず、関係性にとらわれるあまりに偽りの自己を發展させる。Holmes (1993) は Ds 型と E 型の臨床像を整理し、前者の潜在的な不安は見捨てられることに、後者のそれは侵入されることにあると指摘しており、こうした不安に対する対処として、感情の抑圧や過剰な感情反応を發達させるのだと考えられる。また、D 型の子どもを持つ母親について、AAI における語りの特徴を分析した Main & Hesse (1990) は、これらの母親が愛着関係で生じた喪失を語る際、推論や談話のメタ認知機能が破綻するこ

とに気づき、これを U 型の指標とした。愛着対象を喪失した場合、失われた対象や対象との関係性にまつわる表象を再構築し、喪失という現実に向き合う喪の作業が必要となるが、この作業が不十分であると表象モデルは一貫性のある全体として統合されず、相互に相容れない多重モデルのまま存在し続けてしまう。つまり U 型とは、喪失や外傷を心的に解決できておらず、その表象が全体に統合されないままバラバラに存在しているため、それに触れると認知的・感情的に対処できず、何の方略も發揮できない状態として理解できる。

これらの不安定な愛着が精神病理へのリスク要因になるという仮説は、臨床群の愛着分類を検討した諸研究によっても支持されている (Fonagy, Leigh, Steele, Steele, Kennedy, Mattoon, Target, & Gerber, 1996; Rosenstein & Horowitz, 1996 等<sup>11)</sup>)。それらをメタ分析した van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg (1996) は、健常群と臨床群における AAI 分類の分布を比較している (Table 1)。3 分類法を用いた研究では、F 型の比率は、健常群の母親 584 名中で 58%，同じく父親 286 名中で 62% であるが、臨床群になると 439 名中 13% にすぎない。また、U 型を加えた 4 分類法による研究では、F 型は健常群の母親 487 名中で 55%，父親 241 名中 57% に対して、臨床群 165 名中 8% と少なく、臨床群における U 型 (40%) と E 型 (25%) の多さが目立つ。

Table 1 健常群および臨床群の愛着分布  
(van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg, 1996)

	AAI 分類				計
	Ds	F	E	U/CC	
健常群(母親)	139(24)	338(58)	107(18)	-	584(100)
	80(16)	269(55)	44(9)	94(19)	487(100)
健常群(父親)	63(22)	177(62)	46(16)	-	286(100)
	36(15)	138(57)	27(11)	40(17)	241(100)
臨床群	180(41)	55(13)	204(46)	-	439(100)
	43(26)	14(8)	42(25)	66(40)	165(100)

注 1) 上段に 4 分類法、下段に 3 分類法による研究を用いたメタ分析結果を示す。

注 2) 数値は人数を示し、括弧内にはパーセンテージを示す。

注 3) CC 型 (cannot classify) とは、分類不能型を言う。

###### (2) 愛着の型による精神病理の特徴

ところで、愛着の型によって用いる方略が異なること

から、優勢な病理にも愛着の型による特徴が見られると予測される。以下、この予測について検討する。

まず、DSM 第 I 軸の疾患と愛着の型の関連については、不安障害・気分障害・摂食障害・行為障害に関する知見が得られている。たとえば、Fonagy et al. (1996) によれば、うつ病では親の理想化が低く、怒りが強いのに対し、摂食障害では逆に理想化が強いという特徴が見られた。また不安障害については44名中80%までがU型に分類され、身体的・性的虐待との強い関連が見出された。さらにCole-Detke & Kobak (1996) も、女子大学生において、摂食障害と不活性化方略 (=Ds型)、抑うつと過活性化方略 (=E型) の関連を見出している。またRosenstein & Horowitz (1996) では、行為障害はDs型と、感情障害はE型との関連が確かめられた。これらの結果は一応、予測の方向に一致していると思われる。

また、第 II 軸の人格障害については、後で見るように境界性人格障害とE型やU型との関連が一貫して見出されている (Fonagy et al., 1996; Patrick, Hobson, Castle, Howard, & Maughan, 1994等)。なお、Rosenstein & Horowitz (1996) は、人格障害と診断された思春期の入院患者24名について愛着の型を検討しており、統計的分析は行っていないが、自己愛性はDs型に、強迫性・演技性・分裂病型・境界性はE型に分類されている。

## B. 喪失や外傷の解決・未解決と精神病理との関連

### (1) 外傷理論－解離性障害と境界性人格障害－

人格の形成途上、思春期以前に被った外傷体験は、それが親による無視のような陰性のものであっても、人格全般や防衛機制、行動様式にまで多彩な障害をもたらさう。

岡野 (1995) は、近年の米国精神医学の流れをふまえ、外傷体験を中核に据えた精神病理論を展開している。彼によれば、外傷性精神障害には次の3つの特徴がある。①解離状態：圧倒的な出来事により、通常保っていた自我の体験 (感覚、感情、記憶、行動) の一部が自我に統合されなくなった状態。②外傷性の記憶：関連する記憶が断片的になり、予告なしに勝手に記憶が襲ってくる過覚醒状態と、それへの防衛としての鈍麻反応。③外傷性の論理：自己と世界との関わりに関して「自分が可愛いせいで父親が自分を誘惑したんだ」「自分で自分を先に傷つけば誰にも傷つけられずにすむ」といった非論理的で魔術的な表象・思考、特に対人関係において自分が一切コントロールできないという確信。

解離傾向は子ども時代に頻繁に用いられる機制であり、そのような時期に被った外傷体験は、防衛機制として顕著な形で解離現象を生む。それが病的な形でそれ以降の精神生活を支配する状態が、解離性障害である (岡野, 1995)。実際、解離性同一性障害においてはきわめて高率で子ども時代の被虐待が報告されると言われ、岡野 (1995) はおよそ90%と指摘している。解離性障害や自傷行為と早期の外傷との関連を支持する研究も多い。たとえば van der Kolk, Perry, & Herman (1991) では、自傷行為を示した患者の70~90%に、子ども時代の種々の外傷体験が見られ、自殺企図は虐待等の外傷と、自傷行為は無視と関連していた。彼らはリストカットについて、患者が自分自身で解離状態から抜け出すことを目的として行われるのではないかと考えている。

一方、境界性人格障害においては、原始的な防衛機制であるスプリッティング (splitting) が中心的に用いられていると言われる<sup>12)</sup>。林 (1990) の概説によれば、境界性人格障害は、自己表象と他者表象とは分離されているものの、それぞれの表象や感情は未統合の部分対象関係にとどまっておき、対象恒常性が確立されていない段階にある。そのため、他者に不信を抱きながらもしがみつかざるを得ない。これが対象欲求と接近恐怖のディレンマであり、対象への接近欲求は、対象に呑み込まれる恐れと対象を破壊し対象に復讐される恐れとを引き起こし、接近恐怖を招くが、それによって見捨てられ抑うつが生じるといふ悪循環に陥るといふ。境界性人格障害の患者も、その多くが外傷体験を報告することが知られている。たとえば、Herman, Perry, & van der Kolk (1989) では、境界性人格障害患者21名中、81%が子ども時代の外傷体験を報告し、身体的虐待 (71%)、性的虐待 (68%)、家庭内暴力の目撃 (62%) のいずれも高率となっている。

### (2) 愛着理論の視点から－メタ認知の重要性－

このような、解離性障害や境界性人格障害に特有の、表象が断片化された状態は、Bowlbyの多重モデル、ひいてはU型を想起させる。接近と回避の葛藤はD型の特徴でもあり、D型の子どもの内界にも、そうした断片的な自己表象と他者表象が存在しているのかもしれない。それは、保護を求める相手であるはずの愛着対象との関係において、慢性的に傷つけられることで、助長されるのかもしれない。Main & Morgan (1996) も、D型の子どもが解離状態を慢性的な外傷に対する防衛的対処として用いた結果、後の解離性障害を引き起こす可能性を指摘している。こうした中で、外傷体験と精神病理との関連について、愛着にまつわるメタ認知の観点を導

入し、検討した研究がさかんに報告され始めた。

Adam, Sheldon-Keller, & West (1996) は、自殺企図や深刻な希死念慮のある思春期の患者69名と統制群の患者について、U型を含めて愛着の型を比較した。すると、愛着関連の外傷を報告する被験者は両群とも多い(86%, 78%) が、そのうちU型と判定された割合は自殺群が統制群を大きく上回っていた(73%, 44%)。また、自殺群ではU-E型が多いのに対し、統制群ではDs型やF型が多かったのである。これより、因果の方向までは断定できないものの、外傷体験と思春期の自殺企図を、愛着にまつわるメタ認知的モニタリングの機能欠如(外傷の心的未解決)が媒介することが示唆されたとと言える。

Patrick et al. (1994) は、境界性人格障害の患者12名と、気分変調性障害の患者を比較した。その結果、境界性人格障害群では全員がE型に分類され、うち10名が外傷体験へのとらわれを特徴とするE3型とされたうえ、U型は12名中9名にも上った。これに対し、気分変調性障害群ではDsが優勢で、多くが外傷体験を解決しており、U型は2名にすぎなかった。またFonagy et al. (1996) でも、36名の境界性人格障害患者のうち、3分類法では47%がE型に、4分類法では89%がU型に分類された。そこで次に、「自己や対象の心的状態について一貫性ある態度で考慮できる」メタ認知能力、すなわち内省的自己機能(Reflective-Self Function, 以下RSF)を導入して検討した<sup>13)</sup>。その結果、被虐待を報告した53名中60%が境界性人格障害であったが、RSFのありようで分類してみると、RSF低群では、被虐待を報告した29名中の98%が境界性人格障害であったのに対して、RSF高群では、被虐待を報告した24名中の同障害患者はわずか17%だったのである。

以上より、外傷体験そのものの有無よりもそれを心的に解決できていないことが、境界性人格障害と関連していることが示唆される。Fonagy et al. (1996) は、子ども時代に虐待を受けた人は心的機能を抑制してしまうため、虐待が未解決のままとなり、境界性人格障害が顕在化するという発症プロセスを推測している。

ただし、従来「洞察できる力」というような曖昧な言葉で表現されてきた患者のメタ認知能力を、その生々しさを残しつつ精密に測定したことは評価されて然るべきであるが、これまでの諸研究には、方法論上の問題がないわけではない。つまり、研究の多くが回顧式の自己報告に依拠しているため、外傷体験の解決・未解決を論じる以前に、そもそも外傷が実際に存在したか否かを確かめようがなく、その因果関係も確定できないのである。

その点で、Carlson (1998) の研究は、非常に画期的かつ説得力あるものである。彼女は157名を対象に、24ヶ月から19歳までという長期の縦断研究を行う中で、乳児期のD型と解離性障害との関連を予測的に検討した。その結果、早期の被養育経験と、思春期の精神病理および解離症状を、D型の傾向が媒介していることを見出している。

### C. 喪失や外傷の解決・未解決と養育行動との関連

#### (1) 外傷体験のある親を持つ子どもの愛着-メタ認知の重要性-

未解決の外傷的体験を抱えて親となった場合、子どもの愛着もまた不安定になったり組織化されなかったりしやすいという形で世代間伝達を引き起こしやすいことが、これまでの研究で明らかにされてきている。

たとえば、Ainsworth & Eichberg (1991) は、母親に喪失や外傷体験がある場合の母子の愛着を検討した。その結果、D型の乳児を持つ母親15名のうち、10名までが過去に愛着対象を亡くしたままその喪の作業がなされておらず、3名には深刻な外傷の未解決(病気で死にかけた経験、夫の物質濫用、父親による虐待)が示唆された。また、喪が未解決である母親10名の子どもが全員D型に分類されたのに対して、喪失を解決している母親の子どもでD型となったのは20名中2名のみであった。また、Fonagy, Steele, Steele, Higgitt, & Target (1994) も、母親が子ども時代に被った剥奪的経験(11歳未満での親との長期分離、親の失業や病気、不在等)に対する、内省的自己機能の驚くべき働きを証明している。すなわち、乳児の愛着の安定性と母親のRSFが強く関連しており、剥奪的環境で育った母親をRSF低群と高群に分けると、前者の子どもは17名中16名までが不安定な愛着を示したのに対し、後者では10名全員がB型となったのである。

#### (2) 母子相互作用の重要性

このように、外傷を心的に解決しているか否かが、子どもの愛着との関連でも大きな意味を持つてくる。これに関しては、親が子どもとの日常的な相互作用において、ふとした拍子におびやかされて防衛的になるというダイナミクスを仮定する論者が多い。たとえば、Ainsworth & Eichberg (1991) は、D型児を持つ母親には、自分自身が親に対して抱えている恐怖に満ちた記憶が現在の日常生活に突然侵入してきて、かつての不安が再びよみがえることがあるのだらうと推測している。また、被虐待経験のある母親とその18ヶ月児を対象としたLyons-Ruth & Block (1996) は、身体的虐待を受け



ていた母親が子どもに対する敵対的・侵入的行動を表しやすく、性的虐待を受けていた母親が子どもからの引きこもりと情動の平板化を示しやすいことを見出しており、こうした情緒的・物理的な引きこもりや隠れた敵意について、それを母親自身の早期の外傷にまつわる恐れや無力感、憤りがよみがえることに対する防衛として解釈している。

何らかの引き金により、おびやかされて生じる親のふるまいは、子どもの側してみれば、その場に生じていることとは全く無関係であったり理解しがたかったりするため、子どもを非常に困惑させ、結果として安定した愛着の形成を妨げやすいと推測される。実際、Main et al. (1985) によると、乳児期にD型に分類された子どもは、親が子ども時代における愛着対象の喪失を解決できていない場合が多かったが、6歳での分離・再会課題で再会時に親を罰したり、逆に親を心配して世話したり（役割逆転）といった親をコントロールする行動を示したという。つまり、子どもも、親からの非応答的な反応によって振り回されるよりは、自ら親をコントロールする相互作用の表象モデルを作りあげるのだと考えられる。これとは反対に、AAIにおけるearned-secure、すなわち「内容は早期の過酷な関係を示していたが、語りの一貫性によってF型に分類された親」が、insecureの親と同程度に高い抑うつ得点を示しながらも、子どもと協力して難題を解くという実験で測定した養育スタイルについてはcontinuous-secureと同様に良好な得点を獲得することが見出されている(Pearson, Cohn, Cowan, & Cowan, 1994)。したがって、親が愛着に関していかにメタ認知能力を働かせることができるかということは、具体的には相互作用における親の関わり方を通して、子どもの愛着に影響しうると考えられる。

## V. 不幸な世代間伝達を越えるために

以上のことから、子ども時代に愛着にまつわる喪失や虐待等の外傷を経験し、心的に未解決なまま親となったとき、わが子との相互作用において湧き起こるネガティブな感情を抱えきれず、はからずも子どもに同様の外傷を与えてしまうという世代間伝達が生じることが予測される。Bowlby (1980) も、一度モデルが構築されると更新は生じにくいと指摘する。実際、親のAAI分類と子どものSSP分類の一致率を見た諸研究は、66~81%という高い値を報告している(Benoit & Parker, 1994; Fonagy, Steele, & Steele, 1991; Steele, Steele, & Fonagy, 1996; Ward & Carlson, 1995等)。しかし同時

に、内的作業モデルの更新、修正の可能性も残されており(遠藤, 1992; 佐藤, 1998)、逆境を乗り越え、養育時のストレスに対する弾力性を備えた、RSFの高い母親やearned-secureの母親も存在する。彼女たちは、いつ頃どのようにして、過去の深刻な経験を内的に統合し、それについて実感を伴って思い出しながらも過剰にとらわれることのない状態に到達したのだろうか。

第一に考えられる要因として、既に言及したメタ認知的能力(Fonagy et al., 1991; Main, 1991)が挙げられよう。Main (1991)によれば、形式的操作段階に入る思春期以降、メタ認知的機能の高まりによって、愛着対象の思考や感情と自分自身のそれとが区別できるようになり、関係性の捉え直しが始まると言う。ただし、Bretherton (1990)の指摘するように、これが単独で効果的に機能するとは考えにくく、やはり(代理的な)安定した愛着関係があってこそ可能となり、また有効であろう。

したがって第二に、新たな愛着関係の役割が大きいと考えられる。つまり、親との間であたたかい関係性を持ち得ず、不安定な内的作業モデルが形成されてしまった場合でも、親以外の新たな愛着対象との間で、既存のモデルから予期されるものとは全く異なる、ポジティブな相互作用の連鎖を積み重ねることができれば、その経験を反映して、安定した表象モデルへと徐々に変容していくというプロセスを想定しうるだろう。ただし、早期であるほど表象モデルは可塑性に富むと言われるが、たとえ代理的对象との関係性によって子どもの持つモデルが一時安定しても、日常の過酷な環境がそのままであれば、モデルの変化も長続きするとは限らず、必ずしも適応に繋がるとは言えない。そこで、新たな対象は子どもの「防壁」となるほどの存在であり、一時的にはなく持続的に関われる存在であることも不可欠であろう。一方、より後の段階ではモデルの固定性が強化されており、その防衛的処理過程によって、新たな対象との関わりも不安定なものになりやすいという問題が出てくる。そこで、対象が転移に巻き込まれずに「生き残る」こと、すなわち、安定した関係性の表象を繰り返し強固に提示し続けることが重要になるであろう。この点から言えば、配偶者は親よりも長く人生を共にする相手である。また、配偶者の選択に関しても、van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg (1996)によると、Ds型やE型の女性もF型の相手を得ている場合が少なからずある(43%, 33%)という。したがって、安定した配偶者との関係性で生じる様々な相互作用に基づいて、不安定なモデル自体が修正、再構築されていき、それと並行

する形で親との関係性を振り返り、自らの内に統合する作業が進められていくという可能性も、決して低くはないと考えられる。

第三に、自らが親となって子どもを養育すること自体を、一つの貴重な機会と見なすことができる。家族の機能不全や子どもの症状には、親の潜在的な関係性の病理の表れであると考えると対応しやすいことが多い。これは裏を返せば、子どもに未解決の葛藤を揺さぶられて病理を顕在化させることを通して、親自らが変化へと開かれることを意味する。たとえば、ミルクも飲んでくれない泣きわめくわが子を前に、まるで自分にわざと嫌がらせをしているように感じてしまい、傷ついている親にとっては、その子どもが配偶者や治療者との関わりなどによって安定し、微笑みを見せ、確かに自分に愛着を寄せていると感じられたときこそ、何より嬉しい瞬間であり、変化への第一歩となるであろう。そのためには当然、配偶者や治療者などが辛い道程を支え、「防御壁」として機能していく必要がある。さらに、Fraiberg, Adelson, & Shapiro (1975) は、想起されにくいのは子ども時代の過酷な経験自体ではなく、それにまつわる情緒的体験であることを指摘し、虐待という行動化の反復を防ぐには、治療者が情緒的にも道具的にも母子を抱える環境となりながら、分析的解釈も行うことによって、徐々に子ども時代の痛みと恐怖に接近していくことが不可欠であると述べている。赤ちゃん部屋にひそんで現在の母子の関わりを妨げる、過去の不幸な関係性の「おばけ」は、あたたかな日の光に晒されることで弔われ、魔術的な力を失うと言えるが、そのチャンスを運んでくれるのは他ならぬ子どもなのかもしれない。

以上の要因については、Fraiberg et al. (1975) を始めとしてすぐれた臨床的事例研究はあっても、その力動的なプロセスを実証的に検討する方法は、今のところほとんど見あたらないと言ってよい。今後の課題としては、面接法のような質的な手法を用いた、縦断的研究を行うことが不可欠であると考えられる。

(指導教官 田中千穂子専任講師)

### 補注

- 1) この場合、Ds・E・Fのいずれかが副分類として必ず付加される。
- 2) たとえば、Egeland & Sroufe (1981) では、無視を受けている子どものうち、12ヶ月時で24名中36%が、18ヶ月時には23名中47%がB型に分類され、身体的虐待を受けている子ども4名のうち、12ヶ月時では半数が、18ヶ月時では全員がB型に分類された。また、12ヶ月、18ヶ月、24ヶ月の愛着を縦断的に検討

- した Schneider-Rosen, Braunwald, Carlson, & Cicchetti (1985) でも、被虐待児におけるB型の比率は各時点で、29% (17名中)、23% (26名中)、32% (28名中)であった。
- 3) The Relatedness Scales 尺度により、情動の質と心理的接近欲求の2次元を組み合わせて得られる5つの型(optimal·adequate·deprived·disengaged·confused) が設定された。このうち、optimalやadequateはB型の愛着に、deprivedはC型、disengagedはA型、confusedはD型に相当する。
- 4) ここでは optimal-adequate,deprived-disengaged,confused の3つに分類された。
- 5) 就学前児は、A(defended)・B(secure)・C(coercive)・A/C(defended/coercive)・AD(anxious depressed)・IO(insecure other)に分類され、このうちA/C・AD・IOは、愛着の中心的方法が不確定な一群としてまとめられた。
- 6) このうち行為障害の診断は、6歳未満では適用されない。
- 7) 同じサンプルについて報告した Renken et al. (1989) も、乳児期のA型が、小学校1～3年生の男児における攻撃性と受動的な引っ込み思案の両方を予測することを見出している。
- 8) A・B・C・controlling・insecure-otherに分類された。
- 9) 彼らは18ヶ月時の愛着と、両親評定や家庭とグループでの観察による問題行動との関連を検討したが、有意な関連はA型の女児におけるグループ観察での評定に関して得られたのみであった。
- 10) これに関連して Lyons-Ruth (1996) は、D型には2種の下位集団がある可能性を指摘し、中流階級群で見られるB寄りのD型と、ハイリスク群におけるA寄りのD型を区別している。B-D型児の母親が子どもから引きこもるのに対して、A-D型児の母親は、侵入的で役割逆転を示す傾向があり、抑うつや被虐待の既往、入院歴、虐待歴など深刻な心理社会的問題がある場合が多いという (Lyons-Ruth, Repacholi, McLeod, & Silva, 1991)。
- 11) Rosenstein & Horowitz (1996) では、患者27名中のF型は4分類法で2%、3分類法で3%ときわめて少ない。さらに、精神病以外の精神疾患による入院患者82名を対象に、4分類法で統制群と比較した Fonagy, Leigh, Steele, Steele, Kennedy, Mattoon, Target, & Gerber (1996) によれば、F型の比率は統制群では59%であるが患者群では11%にすぎず、U型は統制群では7%とごく少数なのに対して患者群では76%と高率である。また、AAIのほとんどの下位尺度についても患者群と統制群で差が見られている。
- 12) 境界性人格障害と解離性同一性障害の病理はしばしば混同され、診断が重複することもあるという。これについて、岡野 (1995, 1997) は、解離性同一性障害が境界性人格障害と「誤診」されている可能性や、両者を合併している (解離した人格の一つが境界性人格障害である) 可能性を指摘しているが、境界性人格障害と解離性同一性障害の共通点と相違点については、以下のように理解される。スプリッティングの機制自体は両障害に存在するが、境界性人格障害においてはそこに投影や外在化の機制が働くのに対し、解離性同一性障害ではそれらの機制は抑制される。すなわち、前者ではスプリッティングが投影や外在化と組み合わせられて他者への攻撃や責任転嫁という形を取り、周囲を振り回すが、後者では虐待的な悪い対象イメージを投影や外在化により吐き出すことが抑制されるために、スプリッティングが人格間の病的な解離へと発展するという (岡野, 1997)。
- 13) RSFの測定は、RSF尺度 (Fonagy, Steele, & Steele, 1991; Fonagy, Steele, Steele, Higgitt, & Target, 1994) をAAIの面接記録に適用することで行われた。

## 引用文献

- Adam, K.S., Sheldon-Keller, A.E., & West, M. 1996 Attachment organization and history of suicidal behavior in clinical adolescents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 264-272.
- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Ainsworth, M.D.S., & Eichberg, C. 1991 Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure, or other traumatic experience. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp.160-183). Routledge.
- Benoit, D., & Parker, K.C.H. 1994 Stability and transmission of attachment across three generations. *Child Development*, 65, 1444-1456.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss. Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books. (revised ed. 1982)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss. Vol.2: Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss. Vol.3: Loss*. New York: Basic Books.
- Bretherton, I. 1990 Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, 11, 237-252.
- Bretherton, I., Ridgeway, D., & Cassidy, J. 1990 Assessing internal working models of the attachment relationship: An attachment story completion task for 3-year-olds. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp.273-308). Chicago: University of Chicago Press.
- Carlson, E.A. 1998 A prospective longitudinal study of attachment disorganization/disorientation. *Child Development*, 69, 1107-1128.
- Carlson, V., Cicchetti, D., Barnett, D., & Braunwald, K. 1989 Disorganized / disoriented attachment relationships in maltreated infants. *Developmental Psychology*, 25, 525-531.
- Cicchetti, D., & Barnett, D. 1991 Attachment organization in preschool aged maltreated children. *Development and Psychopathology*, 3, 397-411.
- Cicchetti, D., & Toth, S.L. 1997 Perspectives on research and practice in developmental psychopathology. In I.E. Sigel & A. Renninger (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol.4. Child psychology in practice* (pp.480-583). John Wiley & Sons, Inc.
- Cole-Detke, H., & Kobak, R. 1996 Attachment processes in eating disorder and depression. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 282-290.
- Crittenden, P.M. 1981 Abusing, neglecting, problematic and adequate dyads: Differentiating by patterns of interaction. *Merrill-Palmer Quarterly*, 27, 201-218.
- Crittenden, P.M. 1985 Maltreated infants: Vulnerability and resilience. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 26, 85-96.
- Egeland, B., Pianta, R., & O'Brien, M.A. 1993 Maternal intrusiveness in infancy and child maladaptation in early school years. *Development and Psychopathology*, 5, 359-370.
- Egeland, B., & Sroufe, L.A. 1981 Attachment and early maltreatment. *Child Development*, 52, 44-52.
- 遠藤利彦 1992 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- Fagot, B.I., & Kavanagh, K. 1990 The prediction of antisocial behavior from avoidant attachment classifications. *Child Development*, 61, 864-873.
- Fonagy, P., Leigh, T., Steele, M., Steele, H., Kennedy, R., Mattoon, G., Target, M., & Gerber, A. 1996 The Relation attachment status, psychiatric classification, and response to psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 22-31.
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Higgitt, A., & Target, M. 1994 The Emanuel Miller Memorial Lecture 1992: The theory and practice of resilience. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 231-257.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Moran, G.S., & Higgitt, A.C. 1991 The capacity for understanding mental states: The reflective self in parent and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, 12, 201-218.
- Fraiberg, S., Adelson, E., & Shapiro, V. 1975 Ghosts in the nursery: A psychoanalytic approach to the problems of impaired infant-mother relationships. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 14, 387-421.
- Gaensbauer, T.J., Hermon, R.J., Cytryn, L., & McKnew, D. 1984 Social and affective development in infants with a manic-depressive parent. *American Journal of Psychiatry*, 141, 223-229.
- Greenberg, M.T., DeKlyen, M., Speltz, M.L., & Endriga, M.C. 1997 The role of attachment processes in externalizing psychopathology in young children. In L. Atkinson & K. J. Zucker (Eds.), *Attachment and psychopathology* (pp. 196-222). New York: Guilford.
- Greenberg, M.T., Speltz, M.L., & DeKlyen, M. 1993 The role of attachment in the early development of disruptive behavior problems. *Development and Psychopathology*, 5, 191-213.
- Greenberg, M.T., Speltz, M.L., DeKlyen, M., & Endriga, M.C. 1991 Attachment security in preschoolers with and without externalizing problems: A replication. *Development and Psychopathology*, 3, 413-430.
- 林直樹 1990 境界例の精神病理と精神療法 金剛出版
- Herman, J.L., Perry, J.C., & van der Kolk, B. 1989 Childhood trauma in borderline personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 146, 490-495.
- Holmes, J. 1993 *John Bowlby & attachment theory*. London: Routledge. 黒田実郎・黒田聖一(訳) 1996 ボウルビーとアタッチメント理論 岩崎学術出版社
- Lynch, M., & Cicchetti, D. 1991 Patterns of relatedness in maltreated and nonmal treated children: Connections among multiple representational models. *Development and Psychopathology*, 3, 207-226.
- Lyons-Ruth, K., & Block, D. 1996 The disturbed caregiving system: Relations among childhood trauma, maternal caregiving, and infant affect and attachment. *Infant Mental Health Journal*, 17, 257-275.
- Lyons-Ruth, K., Alpern, L., & Repacholi, B. 1993 Disorganized infant attachment classification and maternal psychosocial problems as predictors of hostile-aggressive behavior in the preschool classroom. *Child Development*, 64, 572-585.
- Lyons-Ruth, K., & Connel, D., Zoll, D., & Stahl, J. 1987 Infants at social risk: Relations among infant maltreatment, maternal behavior, and infant attachment behavior. *Developmental Psychology*, 23, 223-232.

- Lyons-Ruth, K., Repacholi, B., McLeod, S., & Silva, E. 1991 Disorganized attachment behavior in infancy: Short-term stability, maternal and infant correlates, and risk-related subtypes. *Development and Psychopathology*, 3, 377-396.
- Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings and directions for future research. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp.127-156). Routledge.
- Main, M., & Cassidy, J. 1988 Categories of response to reunion with the parent at age six: Predictable from infant attachment classifications and stable over a one-month period. *Developmental Psychology*, 24, 415-426.
- Main, M., & Goldwyn, R. 1984 Prediction of her infant from mother's representation of her own experience: Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, 8, 203-217.
- Main, M., & Hesse, E. 1990 Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status: Is frightened and/or frightening parental behavior the linking mechanism? In M.T. Greenberg, D.Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp.161-182). Chicago: University of Chicago Press.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (1-2, Serial No.209), 66-104.
- Main, M., & Morgan, H. 1996 Disorganization and disorientation in infant strange situation behavior: Phenotypic resemblance to dissociative states. In L.K. Michelson, & W.J. Ray (Eds.), *Handbook of dissociation: Theoretical, empirical, and clinical perspectives* (pp.107-138). New York: Plenum Press.
- Main, M., & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp.121-160). Chicago: University of Chicago Press.
- 岡野憲一郎 1995 外傷性精神障害-心の傷の病理と治療- 岩崎学術出版社
- 岡野憲一郎 1997 スプリッティングと多重人格 精神科治療学, 12, 1031-1038.
- Patrick, M., Hobson, R.P., Castle, D., Howard, R., & Maughan, B. 1994 Personality disorder and the mental representation of early social experience. *Development and Psychopathology*, 6, 375-388.
- Pearson, J.L., Cohn, D.A., Cowan, P.A., & Cowan, C.P. 1994 Earned-and continuous-security in adult attachment: Relation to depressive symptomatology and parenting style. *Development and psychopathology*, 6, 359-373.
- Radke-Yarrow, M. 1991 Attachment patterns in children of depressed mothers. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp.115-126). Routledge.
- Radke-Yarrow, M., Cummings, E.M., Kuczynski, L., & Chapman, M. 1985 Patterns of attachment in two-and three-year-olds in normal families and families with parental depression. *Child Development*, 56, 884-893.
- Radke-Yarrow, M., McCann, K., DeMulder, E., Belmont, B., Martinez, P., & Richardson, D. 1995 Attachment in the context of high-risk conditions. *Development and Psychopathology*, 7, 247-265.
- Renken, B., Egeland, B., Marvinney, D., Mangelsdorf, S., & Sroufe, L.A. 1989 Early childhood antecedents of aggression and passive-withdrawal in early elementary school. *Journal of Personality*, 57, 257-281.
- 佐藤徳 1998 内的作業モデルと防衛的情報処理 心理学評論, 41, 30-56.
- Schneider-Rosen, K., Braunwald, K., Carlson, V., & Cicchetti, D. 1985 Current perspectives in attachment theory: Illustration from the study of maltreated infants. In I.Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (serial No.209), 194-210.
- Speltz, M.L., Greenberg, M.T., & DeKlyen, M. 1990 Attachment in preschoolers with disruptive behavior: A comparison of clinic-referred and nonproblem children. *Development and Psychopathology*, 2, 31-46.
- Steele, H., Steele, M., & Fonagy, P. 1996 Associations among attachment classifications of mothers, fathers, and their infants. *Child Development*, 1996, 67, 541-555.
- Teti, D.M., Gelfand, D.M., Messinger, D.S., & Isabella, R. 1995 Maternal depression and the quality of early attachment: An examination of infants, preschoolers, and their mothers. *Developmental Psychology*, 31, 364-376.
- Toth, S.L., & Cicchetti, D. 1996 Patterns of relatedness, depressive symptomatology, and perceived competence in maltreated children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 32-41.
- van der Kolk, B., Perry, J.C., & Herman, J.L. 1991 Childhood origins of self-destructive behavior. *American Journal of Psychiatry*, 148, 1665-1671.
- van I. Jzendoorn, M.H., & Bakermans-Kranenburg, M.J. 1996 Attachment representations in mothers, fathers, adolescents, and clinical groups: A meta-analytic search for normative data. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 8-21.
- Ward, M.J., & Carlson, E.A. 1995 Associations among adult attachment representations, maternal sensitivity, and infant-mother attachment in a sample of adolescent mothers. *Child Development*, 66, 69-79.